

## 第4章 上道郡における製鉄関連遺跡 —その概況と評価—

鉄といえば「真金吹く吉備」、なかでも「美作国」など岡山県北部が、記録や遺跡の状況から鉄生産の中心とみなされてきた。ところが、最近では総社市<sup>(1)</sup>や岡山市<sup>(2)</sup>それに笠岡市<sup>(3)</sup>でも製鉄遺跡の調査例が増え、県南の鉄生産が注目されてきている。しかも県南の製鉄原料は鉄鉱石が卓越しており、県北の砂鉄製錬とは異質であることも指摘されてきている。第2章で紹介した西祖山方前遺跡は、県南製鉄遺跡の一例を担うものである。この章では、上道郡における製鉄関連遺跡の動向を概観し、西祖山方前遺跡の位置付けとその評価を展望しておきたい。

1. まず、備前国の鉄に関する記録を列記してみよう。以下の史料が知られている。

史料①「備前国赤坂郡周匝郷調鍬十口 天平十七年十月二十日」<sup>(4)</sup>

史料②「上道郡浮浪人調鉄一連」<sup>(5)</sup>

史料③「太政官符 応停止備前国進鍬鐵事 延暦十五年十一月十三日」<sup>(6)</sup>

①・②は平城宮出土の木簡資料。①は745年、②は紀年銘がなく年代不詳だが、8世紀代。おそらくその後半になろう。③は796年。いずれも8世紀中葉以降の事項を記したものである。上道郡と鉄を関連付ける史料は今のところ②だけであり、それも資料の発見が新しく、当地の状況に基づいた分析や検討が充分に行われているとは言えない。③は古くから知られていたこともあり、しばしば引用されてきた史料である。

さて、上道郡での鉄生産は、かつてこの史料③と鉄関連地名とを根拠にして語られてきた。上道郡には上道郷・財部郷・居都郷・日下郷・那紀郷の5ヶ郷が所在するが、そのうち居都郷に「鉄」と書いて「くろがね」と読ます地名がある。この地名由来として『改修赤磐郡誌全』は次のように説明する。「備前は、我国第一の褐鉄鉱産地である棚原鉱山をもつが故に鉄を以て調として居つた。処が和銅六年に至り美作分国となり、大切な棚原を失ひ、おきまりの鉄を貢する原料なく、美作国から買い入れては漸く調を納め続けて居つたが、美作分国後八十三年、即ち延暦十五年に至り、絹又は糸を以て鉄にかへる事を許されたのである。また深入りして考へるならば、和銅六年棚原鉱山を失つた当時、調に事を欠く処から、之れに代るべき鉱山を見付けるべく、備前国人は、殆ど総動員して是れを探したであらう。其の渴望して居つた鉱山が、此の居都郷で見つかり、然かも同じ鉱石を得て、国人の喜びは如何程で有ったであろうか、早速村名を鉄と改めて、盛んに採掘したのであろう」<sup>(7)</sup>と。この地名由来は、居都郷周辺で多くの鉄滓が採集されていることもあり以後の地誌<sup>(8)</sup>に引用されるところとなった。そして現在でも確かなこととして語られている。この地名由来を認めた場合、居都郷周辺の製鉄関連遺跡

の大半は713年～796年の間に操業されていて、しかも褐鉄鉱石製錬が前提となる。

2. さてここで目を転じて、私たちは上道郡における製鉄関連遺跡の現況を確認する作業から始めなければならない。しかし上道郡においては、西祖山方前遺跡のほかには製鉄址の調査例がなく、その実態を把握できる資料に乏しい。既知の採集資料と新たな踏査成果だけに頼らざるを得ない状況である。また、上道郡は766年に物理・肩背・沙石郷が藤野郡に分割・編入されるなど、郡境が複雑に変化する地域である。実は、史料②の舞台が主としてどの郷での内容を伝えているのかは不明なのである。ここでは分割前の上道郡を検討地域とする。

遺跡分布図や周辺の踏査などによると、現在のところ第49図のような遺跡が周知<sup>(9)</sup>されている。いずれも鉄滓や炉壁の散布が認められるにすぎない。その鉄滓や炉壁についても分析がされていないので、製錬滓か鍛冶滓かの正確な判断はできない。さらに踏査しても現状では確認できない箇所もあったりで、厳密性に欠ける分布図である。しかし注記を加味すれば概況把握には有効であろう。この分布図を持って当地を踏査すれば、製鉄炉跡や炭窯跡の確認できる場所があることに気づくはずである。製鉄炉・炭窯の検出遺構数は他地域と比べてまだ少ない。これは調査が及んでいるかいないかの問題であって、本質的な事象ではない。むしろ遺跡の認識とその分布状況からみれば、当該地域は確かに鉄生産地として把握でき、しかもその密度から集中的鉄生産地の一つと考えて誤りないと思う。まだ土中に埋もれているであろう遺跡をも勘案すればなおさらのことである。まず、このことを強調しておきたい。

つぎに、最近の調査成果では、県南における6～7世紀の製鉄遺跡は基本的に鉄鉱石を原料としていることが指摘されている。西祖山方前遺跡を例示するまでもなく、ここ上道郡の遺跡からも鉄鉱石が採集されていて<sup>(10)</sup>、県南の他地域と同様の傾向を示している。ただ、年代を限定できる検出状況ではなく、かろうじて、菊山上内池尻遺跡（仮称）採集の須恵器片が年代の一端を示しているのではないかと推量されるだけである。この須恵器片は杯口縁部の破片で7世紀代に編年される。加えて史料②「上道郡浮浪人調鉄一連」からも8世紀代に鉄が生産されていたと推測できる。

これらから、上道郡における7・8世紀の鉄生産は確実性をもって語られよう。ただ、残念ながら、県南他地域のように6～7世紀初頭まで遡る確かな例は提示できない。しかし、出土状況の厳密性を問わなければ、上道北方塚段2号墳羨道部から鉄滓が出土<sup>(11)</sup>している事例がある。鉄滓の副葬から当地における製鉄の証しとし、さらに古墳年代と製鉄年代とに同時性が認められるとの前提にたてば、遅くとも6世紀末～7世紀初頭に、上道郡での鉄生産は開始されていたと想定することができる。すなわち、上道郡では6世紀末から8世紀にかけて鉄の生産が行なわれていた可能性が高いのである。いまひとつ、西祖山方前遺跡の製錬炉は、馬蹄形の溝が巡る平面形態を示す点に特徴がある。いまのところ総社市千引かなくろ谷遺跡<sup>(12)</sup>と笠

## 上道郡周辺における製鉄関連遺跡

番号	名称	性格	備考	参考文献
岡山市	1 西祖山方前遺跡	製鉄炉	炉壁・鉄滓・鉄鉱石	岡山市教育委員会 発掘調査 文献2 新規発見 未登録 文献3 新規発見 未登録 文献1 文献1 岡山市教育委員会 確認
	2 金黒谷遺跡	製鉄炉?	炉壁・鉄滓	
	3 平山池西遺跡 (仮称)	横口付 炭窯?	焼土。全壊?	
	4 塚段2号墳	横穴式 石室	鉄滓。発掘調査・消滅	
	5 下池尻遺跡 (仮称)	製鉄炉	炉壁・鉄滓。水没完存	
	6	炉?	鉄滓	
	7	鉄穴流し 跡?		
	8 新池下遺跡 (仮称)	炉	炉壁・鉄滓。土師質土器・備前焼	
瀬戸町	9 皿池遺跡(仮称)	炉?	鉄滓(多量)・須恵器。皿池南側汀線から上方山裾	文献4
	10	炉?	菊山だわの田の畦岸に炉跡?	文献4
	11 二ツ池(上池) 遺跡(仮称)	製鉄炉	炉壁(多量)・鉄鉱石・鉄滓(多量)・須恵器。上内 池の西岸。歴民博には「菊山上内池所在池尻遺跡」 として鉄鉱石の分析を依頼	文献4
	12 かなくそ池遺跡	炉? 横口付 炭窯	鉄滓・焼土。春日神社参道から「かなくそ池」周辺。 地名「金具屋」。かなくそ池東岸の上方に横口付炭窯 (西川 宏氏教示)	文献4・5
	13 堂免遺跡	炉?	鉄滓。「母ヶ谷」	文献4
	14 大平北遺跡	窯?	土師器焼成窯としているが、炉ないし横口付炭窯の 可能性もある。	文献5・7 岡山県教育委員会 発掘調査
	15 卵僧谷遺跡?	炉?	鉄滓。笠岡卵僧谷東より。古代須恵器窯もあり。消 滅	文献4・5
	16	炉?	鉄滓。大池池尻。(乗岡 実氏教示)	
	17 金井谷遺跡	炉?	鉄滓(少量)。弥生～平安の土器片出土	文献4・5
	18 西池遺跡	炉?	鉄滓(少量)。池北東の汀線及びその上の畑。地名 「屋福」	文献4・5
	19 江尻坂折遺跡		7世紀代の木棺墓中に鉄滓	文献4
	20 山王脇遺跡	炉?	鉄滓(多量)・土師器。浅い谷奥の水田岸に露呈	文献4・5
	21 徳王寺製鉄遺跡	炉?	鉄滓。徳王寺跡周辺の畑岸に露呈	文献4・5
邑久町	22 塩井池下遺跡 (仮称)	炉?	鉄滓(少量)。塩井池の下	文献4
	23	炉?	鉄滓。陥没した穴中に鉄滓が充満していた	文献4
	24	炉?	鉄滓。「キコンタワ」。地元では鍛冶屋谷と呼ぶ	文献4
	25 朝露遺跡	炉?	鉄滓・窯壁。「岩子」にある池の周辺に多い。刀鍛冶 の可能性があるとのこと。(宇垣匡雅氏教示)	文献4・5
	26		赤鉄鉱石。(宇垣匡雅氏教示)	
	27 (通称) 四十塚古墳群	炉?	「四十塚」で少量の鉄滓。「製鉄跡などの遺構が密集 していた」。炉壁・鉄鉱石(宇垣匡雅氏教示)。破壊 消滅	文献4・5
	28	炉?	勘定口2号古墳周辺で鉄滓出土	文献4・8
	29 五反河内遺跡	炉?	鉄滓。水田の岸に露呈。消滅	文献4・5
	30 横の坊遺跡	炉?	鉄滓。下の条番神堂境内	文献4・5



第49図 上道郡北東部製鉄関連遺跡分布図 (1/75,000)

番号	名称	性格	備考	参考文献
31		炉?	鉄滓。鍛冶屋奥の条番神堂付近	文献 4
32		炉?	鉄滓・窯壁・土器片(鎌倉)。谷川に鉄滓	文献 4
33		炉?	鉄滓。鍛冶屋尾坂峠県道沿い	文献 4
34		炉?	鉄滓。多田原奥池の内。義光谷。『太田吉岡村誌』では吉光という刀工がいた所としている	文献 4
35		炉?	鉄滓。高山の東側(多田原と保木の境)	文献 4
36		炉?	鉄滓。保木奥池の内、城山下にある	文献 4
山陽町				
37	斎富遺跡	炉?	鉄鉱石・炉壁・鉄滓。南の南方地域山裾にも鉄鉱石が出土。(塙見真康氏教示)	文献 8
38	門前池東方遺跡	炉?	鉄鉱石・炉壁・鉄滓(塙見真康氏教示)	山陽町教育委員会 発掘調査

〔遺跡名は各遺跡地図に依る。名称の定まっていない遺跡については、便宜上池などの目標物名を冠し仮称とした。〕

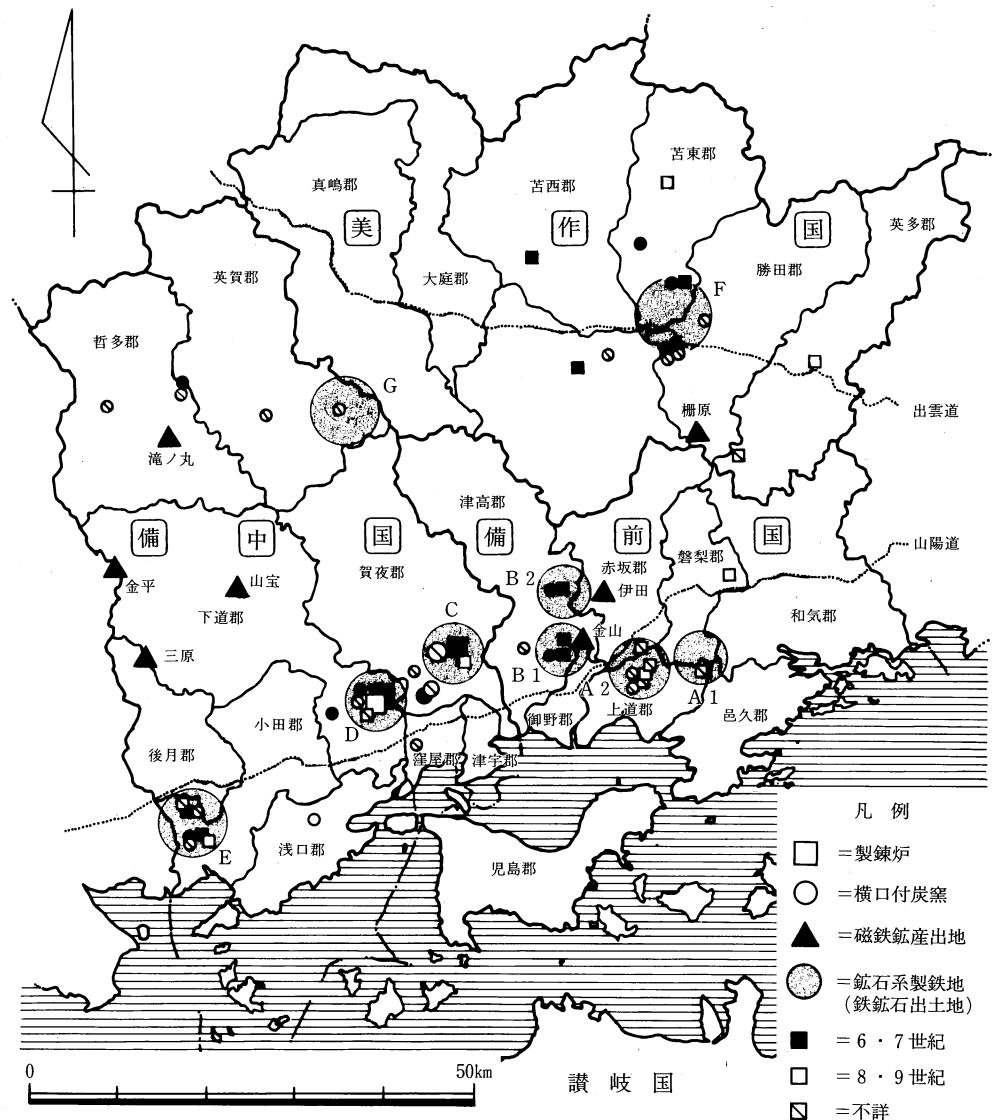
参考文献 本章の註に後続して記載。129頁参照。

岡市鉄塊遺跡<sup>(13)</sup>とで、細部は異なるものの同様な平面形態を示す例が知られている。いずれも6世紀後半と7世紀初頭の年代が想定されている。この年代は、西祖山方前遺跡の製鉄炉において、自然残留地磁気測定が示した年代の一つである6世紀中葉とも適合する。この平面形態を一類型とし共時性を示しているとすれば、上道郡における鉄生産も県南の各鉄生産集中地域と同様な展開を辿ったと評価できるのではないだろうか。確かに未だ時期の限定に流動性が見られ、他地域と直接的な比較検討はできない現状はある。しかし、上道郡における製鉄遺跡の動向をこのように評価した場合、各地製鉄遺跡の前後関係や優劣を決定しうる資料の蓄積はまだ無いと判断でき、鉄生産の開始・展開・衰退については当地域をも視野に入れた概観が要求される。県南における鉄生産は、当初から複数の核を形成し操業していった。現状ではそう考える余地を未だ残していると思う。

3. さて、岡山県南の製鉄関連遺跡はどのように評価されているだろうか。光永真一氏の業績<sup>(14)</sup>を代表例として紹介しておこう。

光永氏は、製鉄遺跡を集大成した。そして、6世紀後半から7世紀初頭に操業されていた製鉄関連遺跡（総社市板井砂奥遺跡、同千引かなくろ谷遺跡、岡山市津高団地遺跡群）は、鉄滓の分析からあるいは鉄鉱石を出土することから、基本的に鉄鉱石製錬であった。千引かなくろ谷遺跡に代表される製鉄技術は、吉備における自生的なものではなく、朝鮮（ないし中国）から伝えられたものである。その技術は原料を砂鉄に置き換えることなくなり立つものであったから、当初は鉄鉱石を原料としていたが、次第に砂鉄に置き換えて各地域に広まっていった。先駆的・集中的に製鉄を行っていた備中南部に、その後製鉄遺跡がみられなくなることは、原料を鉄鉱石から砂鉄に変換したことにより、これを豊富に供給しうる美作にその座を譲ったため<sup>(14d)</sup>とまとめた。

4. 県南の製鉄は、その初期において確かに、鉄鉱石それも磁鐵鉱を主たる原料としていた。ここで鉄鉱石による鉄生産集中地の分布をみてみよう（第50図）。今のところ以下の各群にまとめられる。A1=上道郡・磐梨郡、A2=上道郡・赤坂郡、B1・2=津高郡、C=賀夜郡、D=下道郡、E=小田郡、F=勝田郡・苦東郡、G=英賀郡である。律令制下の主要な各郡に分散しているかのような印象が窺えられる。これら生産地が、すべてその近辺ないし郡域内で鉄鉱石を入手していたのであれば、分布の解釈は容易である。しかし、いまのところ、各遺跡出土鉄鉱石の産出地は確定されていない。ちなみに岡山県における磁鐵鉱産出地は次の場所が知られている<sup>(15)</sup>。赤坂郡伊田鉱山、津高郡・御野郡金山、下道郡金平鉱山・山宝鉱山、後月郡三原鉱山、勝田郡棚原鉱山、哲多郡滝の丸鉱山（いずれも旧郡名にて表示）。図示されているように、全ての郡域内に鉄鉱石産出地を見いだすことはできない。鉄鉱石の確保は、郡域外をも対象範囲に据えて賄われていた可能性を示していると思う。



第50図 製鍊炉・横口付炭窯分布概念図

主たる磁鉄鉱産出地は前述のとおりであるが、そもそも、岡山県内には磁鉄鉱を産出する鉱山が多いと言う<sup>(16)</sup>。上道郡に関しては、従来から棚原鉱山と岡山市金山周辺が候補として挙げられていた。棚原鉱山の場合は褐鉄鉱・黄鉄鉱が主であるが、岡山市金山の場合は磁鉄鉱が「たい積岩中に鉱層をなして産出」<sup>(17)</sup>する状況であり、周辺には地名「金堀」が複数見られる。その一つは大正年間に試掘されたことがあり<sup>(18)</sup>、また金山山頂付近でも昭和になって試掘されたことがあると言う<sup>(19)</sup>。金山ないしその周辺は鉱石採掘の第一候補地であろう。また、上道郡居都郷「鉄」にも「金堀山」がみられる。廢坑跡があり、明治の中ごろに掘ってい

た<sup>(20)</sup>。鉄鉱石とは言明できないが、注意を払う必要はあると思われる。採算および効率を問わなければ、結構身近な場所での鉱石採取は容易であったと考えられる。とすれば、原料の入手はそれほど遠方を想定する必要はなく、逆に鉄鉱石の入手が得やすい場所に製鉄が展開されていったとの想定も可能であろう。このことは、現在確認されている鉄鉱石製錬炉の分布は鉄鉱石産出地周辺に位置していたと認識することになる。そして、鉄鉱石にしろ砂鉄にしろ、原料の入手は手近な所からと考える立場に通じ、鉄生産の分布とその盛衰は原料確保の難易を第一義とすることになる。

ここで注意しておきたいことがある。美作地域の鉄原料の問題である。美作地域の古墳に供献された鉄滓の分析によると、6世紀前半後葉から7世紀初頭まで鉱石製錬滓が確認できる<sup>(21)</sup>。加えて『日本靈異記』<sup>(22)</sup>に記載されている鉄穴記事の存在もある。この記事は孝謙天皇の頃とする。とすれば8世紀中葉のこととなる。ただ、『扶桑略記』<sup>(23)</sup>にも同様な逸話が採録されており、こちらは元明天皇の頃とする。とすれば8世紀初頭のこととなる。どちらの年代にしろ、8世紀代に官主導による鉄鉱石採取が美作地域で行われていたことを表記している。砂鉄卓越地域である美作地域とは相容れない事例ないし記事のように思える。これらは、県南と同様に美作地域でも鉄鉱石による製鉄が行われていたこと。しかも8世紀代には官営の鉄鉱山が運営されていた可能性のあること。そして吉備南部からみれば、8世紀代までは、鉄鉱石枯渇化が砂鉄製錬への転換理由とする想定が単純には成り立たないことをも示している。鉄生産衰退の主たる原因を、原料の変換によるものと一概に強調すべきでないのである。ただし、美作地域における原料採取の実態把握にはまだほど遠い認識段階であり、この記事の検討を含めて解決すべき課題は多い<sup>(24)</sup>。

第50図に示された鉱石製錬炉の分布は、6世紀後半から8・9世紀代の状況である。この鉱石製錬炉集中地の分布状況は、いまのところ県南に集中している。ただし、前述の美作地域の問題はまさにこの時期のことであり、美作にも集中的分布が確認される可能性はある。鉄鉱石産出地との位置関係を見ると、近辺での形成もあればそうでない場合もある。直接鉄鉱石産出地に規定された分布状況を示しているとは思えない。では、どのような要因でそれは形成されたとすべきであろうか。

5. 県南の製鉄遺跡は、今のところ6世紀末から7世紀代に盛行の一時期を迎えていた。この時期は、家父長制的世帯共同体の台頭への驚異から、地域的な階級的結束の強化を図るべく有力部族が結集したとされ<sup>(25)</sup>、あるいは五世紀代の「吉備一族の政治的連合」が「倭王権」により分断・再編され、「吉備氏」が分氏されていった<sup>(26)</sup>とする時期である。一方、畿内政権の干渉も激しく、6世紀中葉以降屯倉制をくさびとして畿内政権の官僚に再編されていった時期もある。鉄生産の盛行時期はこのような政治状況に置かれていた。

各首長層にとって、製鉄の操業と製鉄技術者の掌握は、鉄素材の安定確保のためにはぜひ達成しておきたいことであった。その主導的経営の主体が吉備側にあったにせよ、畿内側であつたにせよ、各首長層の命運をかけて運営されていたにちがいない。「応神紀」に始祖伝承の載る「吉備六氏」は、氏名と郡名とが一致する各郡の平野部にその本貫地が比定されている。例えば、上道氏＝上道郡、三野氏＝御野・津高郡、加夜氏＝賀夜郡、津氏＝津宇郡、窪屋氏＝窪屋郡、下道氏＝下道郡、菌氏＝下道郡曾能郷、笠氏＝比定地不詳、この他にも小田氏＝小田郡などが知られている。各郡域を存立基盤とする首長の分立していた状況が読み取れる。さきの分布状況は、各首長の本貫地の近辺に分散・展開しているようにもみえ、有力首長の領域内で鉄生産を経営・掌握していたか、あるいは各郡域に分散・分担させて鉄生産を維持していたようにも思う。鉄鉱石産出地の偏在性から、各郡は生産に向けての協力性と鉄生産技術・知識の共有化など実務上の提携が要求されたことであろう。この時期は首長層の石棺材として、貝殻凝灰岩を共有することに示されるような「吉備」のまとまりはまだ保たれていた。各首長層をまとめる求心力の一端を、製鉄の分野も担っていたのではないだろうか。

ところが各有力首長が、各々畿内勢力とのつながりを重視し独自に行動するようになると、すなわち各氏族の個性と繁栄が主張されると、その紐帶も疎遠になり鉄生産協力化の体制維持も困難になってくる。鉄生産を縮小・放棄せざるを得ない地域もあったことであろう。7世紀以降製鉄遺跡が見いだされなくなる地域はその地域に該当しよう。

県南における製鉄の原料は当初鉄鉱石であった。ところが総社市水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群では、製鉄原料と同地内の板井砂奥11号墳の中に副葬されていた鉄滓の原料とに差異が認められた。製鉄原料は鉱石であるのに、副葬鉄滓は砂鉄系であった。同一地内でありながら、しかも時期も近接しているのに原料に差異が見られるのはなぜか。この事例に対し、古墳と製鉄の遺構の関わりは非常に希薄であり砂鉄製鍊滓は搬入品の可能性を考える立場<sup>(28)</sup>と、鉱石から砂鉄へ原料を変換していった移行期の状況を示すと解釈する立場<sup>(29)</sup>がある。搬入品であるならば、どのような契機で搬入され古墳に副葬されたのか。原料の転換の証しとするならば、調査地内で砂鉄製鍊炉が一基も検出されていないことをどのように説明するのか。残された課題は多い。

鉄生産技術は恐らく朝鮮半島から導入された。その導入時に、既に鉱石と砂鉄は原料として使用されていたとの想定<sup>(30)</sup>と、砂鉄を原料とする製鉄は日本で開発されたと想定する<sup>(31)</sup>二つの可能性が考えられている。美作地域では、鉄滓の分析では両者は当初から並存していた。県南では基本的に鉄鉱石から砂鉄へと転換していったとされる。確かに7世紀代には砂鉄製鍊の兆しが認められる<sup>(32)</sup>。ただし、砂鉄を原料とする製鉄に全面転換したのではなく、両者が並存していた時期もあるようだ。逆に鉱石系製鉄が主流の時にも、砂鉄系製鉄存在の兆しは認

められる。つまるところ、美作地域も県南も当初から鉱石系と砂鉄系の製鉄が、その比率は異なるものの、みられるのである<sup>(33)</sup>。

さて、鉄製品は原料の採取、製鍊、精練そして鍛冶の工程を経て製品化される。この鉄鉱石から砂鉄への転換は原料の差に留まらず、製鍊・精練工程にも影響を与えたと思う。そこには原料の選択・採取を含めて、鉱石系と砂鉄系の二つの技術系統の存在が窺える。原料が全て各鉄生産地近辺で貯蔵されていた訳ではないと先に想定した。そうであれば、原料供給のための機構が形成されていたと考えざるを得ない。鉄鉱石から砂鉄への転換は、この原料供給の機構の変動に対応したものだった可能性がある。砂鉄の供給源はおもに、7世紀以降砂鉄系製鉄が盛行する美作地域であったに違いない。この地域で砂鉄系技術は醸成された。しかも、この地域は畿内勢力の影響の強い地域であった<sup>(34)</sup>。鉄鉱石から砂鉄への転換要因は、各地域における原料の枯渇とかに求めるだけでなく、さきの6～8世紀の政治情勢が影響している。美作地域で醸成された砂鉄系技術と砂鉄供給の体制が確立してくると、周辺への拡散が可能となってきたのであろう。砂鉄の供給ないし砂鉄系技術の拡散は、畿内勢力の主導のもとに進行していったものと思う。そこには技術者の移動も想定される。県南の砂鉄系技術が自然発生的に成立したのでなければ、板井砂奥11号墳副葬鉄滓や笠岡市鉄塊遺跡の例は、「さきがけ」として技術導入された結果を示唆している可能性がある。政治的に意義があったからこそ古墳に副葬されたと解釈する。

繰り返す。吉備における初期段階の鉄生産は、鉱石系製鉄が主体であった。そして地域的特性を反映するかのように、砂鉄系を交えて操業されていた。吉備中枢部の掌握していた製鉄技術ないし技術者集団は鉱石系の技術を保持していたのである。一方、美作地域周辺では鉱石系と砂鉄系が並存していた。鉄鉱石の入手は限定的かつ偏在性を示すから、集中的生産を維持するためには組織的な操業体制が要求されたことであろう。鉱石系鉄生産地が県南の各郡に集中しているかの様相を呈しているのは、各郡の有力者がその体制維持を担っていたことの証しだある。その体制維持の諸条件が崩壊したときに鉱石系製鉄は衰退して行き、畿内勢力に管理された砂鉄系技術大系が浸透してくるのである。この段階では、鉱石系製鉄は郡内での需要を賄う程度に生産が縮小されていったに違いない。

6. 岡山県における鉄生産を以上のように見通した場合、上道郡の鉄生産の終焉はどのように描かれるのであろうか。史料③の太政官符によれば8世紀末に備前国の調鉄の停止が伝えられている。それ以前に既に鉄生産は行われていなかったかのような記事である。しかし、備前国内の磐梨郡石生天皇では砂鉄製鍊が盛んに行われていたのである<sup>(35)</sup>。まさに、「八世紀末ないし九世紀初頭の石生天皇遺跡は備前での製鉄の事実を示して」いるから、史料③の太政官符は「当時の実情をそのまま伝えたもの」ではなく、むしろ「官符の内容は別の視点から検討

すべき」<sup>(36)</sup>ことと理解されるのである。仮に石生天皇遺跡の操業年代を史料③の直前に位置付けたとしても、砂鉄原料による鉄生産が行われていたのである。さきの「鉄」地名の由来に話を返せば、備前国内の製鉄遺跡の実情とその説明とに乖離が生じてきているので、「鉄」に牽引された資料解釈に過ぎないことが明らかになったことと思う。

さて、鉄貢進国の推移は、畿内を軸に編成ないし再編成されていった結果である。だから、史料③の存在さらに『延喜式』の鉄貢進国に備前国が挙げられていないのは、当地における鉄生産の有無の問題ではなく、備前国鉄が重視されなくなった反映なのであろう。その頃には収奪過程での効率性、製品としての質が問われるようになり、次第に鉄生産地が淘汰されていった。砂鉄の採取が可能で豊富な県北に収奪の中心が移っていったのであろう。美作国分割後の備前国は、中国山地の脊梁部を失ったため、原料確保の点から鉄生産地としての地位を最初に下りる立場にあったのである。ましてや、およそ砂鉄採取を期待できそうにない上道郡の地勢にあっては、砂鉄原料の確保はより困難であったと思われる。さらに、鉱石系製鉄が継続されていたとしても、766年の物理・肩背・沙石郷の分離は上道郡における鉄生産地の分割を意味し、恐らくこのあとそう時を経ずして鉄生産は衰退していったと考えられる。この三郷の分離を積極的に評価しようとすれば、和気郡側にすなわち和気氏一族の影響力のもとに、鉄生産地が取り込まれたことを意味する。そして石生天皇遺跡での製鉄の事実がありながら、史料③が認められたことは、和気氏に収蔵される鉄の量の増大を招き、地位基盤を安定化させるのに貢献したことであろう。和気清麻呂は備前国に私墾田百町を所有していたと云うが、その開発にこれら鉄が有効に発揮されたと考える。

史料③は、記録のうえでは、備前国鉄生産が辿った終着である。官的束縛から解かれた製鉄従事者らは、引き続き有力氏族に従属し鉄生産を維持して行った者もあったろう。あるいは個別化してそのまま衰微した者もあったろう。そしてなによりも生産組織の分散化は、多地域との競合に不利となり、衰退の要因となっていった。すなわち、上道郡域の鉄生産は、郡境の変化に象徴されるような度重なる地域への干渉を経て、崩壊して行ったと考えるのである。もはや上道郡域内の鉄生産はその維持のための生産体制が崩壊していたのであり、そして上道郡域内で鉄生産を維持していく意義が認められていなかつことなどから、その崩壊は立て直されることはなかったのである。

7. 西祖山方前遺跡の調査を契機として、上道郡における鉄生産の概況を上記のように描寫した。この想定は西祖山方前遺跡の年代が6世紀後半と前提して述べてきた。もう一方の可能性9世紀前半の年代を前提とすればどのような描寫ができるだろうか。おそらく県北と県南の概況に変更はない。ただ、上道郡の一角に9世紀まで鉱石系鉄生産が存続していたことになり、『日本靈異記』の記事の信憑性がより高まる。そして砂鉄系と鉱石系が9世紀までは並存して

いたとなる。すると前述の鉱石系から砂鉄への変遷過程は修正の必要に迫られる。大幅な書き直しが要請されるようになるだろう。あるいは、西祖山方前遺跡を備前刀関連の特異な事例とみなせば、個別化した製鉄生産者の適応の一姿として評価でき、前述の大幅な修正は免れよう。その場合、備前刀の発生を9世紀まで遡らす事になる。

どのように考えるかは、資料の集積を待ってからとせざるを得ない。にもかかわらず、西祖山方前遺跡の年代が6世紀後半と前提して述べてきたのは、一定の見通しを持ち、以後の資料収集時に比較検討できる目を養っておきたかったからである。確かにまだまだ周辺の踏査が充分でなく、解決すべき事項は山積している。たとえば、各生産地の変遷を把握する。原料が鉱鉱石から砂鉄に変化した状況を把握する。またその年代を押さええる。そのような事項を押さえた後、果たしてどのような叙述が可能となるのであろうか。当該地域の継続踏査と再考を期して、当報告のまとめとしたい。

本章をまとめにあたり、細部にわたり多くの方々の助言・援助を受けた。その成果を十分に活かしきれず、筆者の暴走の感がいなめない。事実を歪曲していないかと危惧する。大方の叱正を待つ。

(神谷正義)

## 註

註1 a 前角和夫『青谷川古墳群 青谷川製鉄関連遺跡（総社市埋蔵文化財発掘調査報告8）』 総社市教育委員会

1990年

b 『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群（総社市埋蔵文化財発掘調査報告9）』 総社市教育委員会

1991年

c 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報1（平成2年度）』 総

社市教育委員会 1991年

註2 a 『津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料』 岡山市教育委員会 1991年

b 下澤公明「白壁奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告23』 岡山県教育委員会 1993

註3 a 岡田博「鍛冶屋遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査4（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70）』 岡山県教

育委員会・建設省岡山国道工事事務所 1988年

b 岩崎仁司「笠岡市鉄塊遺跡」『岡山県遺跡保護調査団ニュース』第5号 1993年7月 3・4頁

註4 『平城宮木簡一（解説）』 奈良国立文化財研究所 1965年

註5 『平城宮木簡二（解説）』 奈良国立文化財研究所 1975年

註6 「延暦十五年十一月十三日官符」『類聚三代格』卷八

註7 『改修赤磐郡誌全』 岡山県赤磐郡教育会 1940年 475頁

註8 『岡山県上道郡古都村史』 岡山県上道郡古都村史刊行会 1958年

註9 a 『岡山市埋蔵文化財分布地図』 岡山市教育委員会 1983年

b 矢部秋夫「製鉄と製銅及び窯跡について」『瀬戸町誌』 瀬戸町 1985年

c 『岡山県遺跡地図』 5分冊 岡山県教育委員会 1978年

d 第49図の郡境・郷境・古代山陽道らは『大廻小廻山城跡発掘調査報告』の第3図を参考に作成した。古代山陽道の道筋もそのまま踏襲している。(『大廻小廻山城跡発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1989年)

註10 a 菊山上内池尻遺跡(仮称) 神谷正義採集

b 四十塚古墳群・大内地内 宇垣匡雅氏採集

c 岡田博「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告22』 岡山県教育委員会

1992年 57頁 赤坂郡域であるが、上道郡境に接した場所である。

d 山陽町門前池東方遺跡・山陽町南方地内で鉄鉱石が出土 塩見真康氏教示

註11 現地説明会資料『上道北方坂口古墳・塚段1号墳・塚段2号墳発掘調査概要』 岡山市教育委員会 1986年

註12 註1 b 前掲書

註13 註3 b 前掲書 3・4頁

註14 a 光永真一「鉄生産」『吉備の考古学』 福武書店 1987年 399~411頁

b 光永真一「製鉄」『岡山県の考古学(地域考古学叢書)』 吉川弘文館 1987年 492~514頁

c 光永真一「第六章第一節三 鉄」『岡山県史(原始・古代1)』 岡山県 1991年 514~524頁

d 光永真一「製鉄と鉄鍛冶」『吉備の考古学的研究(下)』 山陽新聞社 1992年 256~257頁

註15 a 沼野忠之『岡山の鉱物』 日本文教出版 1980年 120頁

b 光野千春・沼野忠之監修、野瀬重人編『岡山県地学のガイド』 コロナ社 1980年 241~242頁

そのほかにも広島通商産業局鉱山部編集『広島通商産業局管内鉱区一覧』中国地方鉱山会などを縦覧すれば鉄を産出する採掘鉱が散見される。

註16 註15 a 前掲書 120頁

註17 註15 a 前掲書 120頁

註18 註7 前掲書 475頁

註19 地元の人の話では、戦中に掘っていたと言う。実際のところ、頂上付近の露頭に磁性を帯びた箇所が認められる。1992年、穴澤義功・乗岡実・草原孝典・扇崎由らによる現地踏査により確認。

註20 a 註7 前掲書 474頁 「赤煉瓦の様な物が出て居つたと云う。思ふに、この鉱山は鉄鉱山で、赤鉄鉱か褐鉄鉱を産して居つたのであろう」とする。

b 註8 前掲書 9~10頁 「先年、鉄の背後の野山を開墾のとき各所に多量の鉱滓が出たと村人は語っている」とする。

註21 安川豊史「古墳時代における美作の特質－群小墳の動向と評価－」『吉備の考古学的研究(下)』 山陽新聞社 1992年 170~172頁



菊山上内池尻遺跡(仮称)  
採集資料

- 註22 「將寫法花經建願人斷日暗穴頼願力得全命縁 第十三」『日本靈異記』卷下  
『三宝絵詞』・『法華験記下』・『扶桑略記』・『今昔物語』にも『日本靈異記』に依るとして同様の記事が載っている。
- 註23 『扶桑略記 第六 元明』
- 註24 古代の鉄素材は砂鉄ではなかったかとし、この記事の内容が事実かどうか疑われていた。ところが総社市他県南の遺跡で鉄鉱石が検出されたことから、この記事は8世紀の鉄鉱石採取にかかわるものとして矛盾がなくなったと解釈されてきている（吉田晶「第四章第三節二 伝統的産業の展開」『岡山県史』古代II 1989年462頁）。しかし、美作地域において8世紀の鉄鉱石製鍊を示す確かな資料はいまのところみあたらない。また、この記事は『冥報記上』に原拠している（『日本靈異記』日本古典文学大系70 岩波書店 1967年 350頁）ことからも、美作における鉄山の状況をそのまま反映していたとは必ずしも考えられないと思う。
- 註25 西川宏『吉備の国』 学生社 1975年 189～194頁
- 註26 湊哲夫「吉備と伊予の豪族」『新版古代の日本4 中国・四国』 角川書店 1992年 148頁
- 註27 註24前掲書 462頁
- 註28 註1 b前掲書 高田明人「製鉄遺跡について」 418頁
- 註29 註14 d 前掲書 256頁
- 註30 大澤正己「日本と朝鮮半島の鉄生産」『季刊考古学』第33号 雄山閣 1990年 75頁
- 註31 a 川越哲志「鉄生産と土器製塩」『新版古代の日本4 中国・四国』 角川書店 1992年 183頁  
b 註14 d 前掲書 256頁
- 註32 大澤正己「菅生小学校裏山遺跡・西坂古墳出土鉄滓の金属学的調査」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5 (岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81)』 岡山県教育委員会・日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 1993年
- 註33 a 註3 b 前掲書 排滓場によっては砂鉄を含む部分と鉄鉱石を含む部分のあることが確認される。ただし、同時期なのかある程度の時期差を示すものかは、厳密には分からぬと云う。排滓場を共用しているのであるから、時期差であったとしても無視できる程度の時間差であったと思う。サンプル土壤洗浄の進行次第では、6世紀末～7世紀に県南でも鉄鉱石と砂鉄製鍊炉が並存していた可能性がある。整理の結果を期待したい。  
b 総社市千引かなくろ谷1号炉廃滓場出土品にも砂鉄製鍊滓が1点だけ確認されていると云う。「鉱石原料主流の中で、砂鉄系がぱっかりと点在する」検出状況では、並存と云うにはほど遠い。しかし、県南でも当初から鉄鉱石と砂鉄製鍊炉が、その比重はともかくとして、並存していた可能性を示唆しているのだろうか。（大澤正己「窪木薬師遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『窪木薬師遺跡 (岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86)』岡山県教育委員会 1993年 318頁）
- 註34 美作地域が、備前・備中地域と比べて、畿内勢力の影響をより強く受けているとする論調が多い。その事由は、吉備中枢部への牽制と交通路ないし鉄資源の掌握にあったとする点ではほぼ共通している。代表的なものを二三紹介しておく。aは地理的・歴史的に美作地域の特質を説いている。bは6世紀中葉にヤマト政権が鉄資源

獲得を目的として組織的な地域支配形態をとったと説く。cは5世紀末に畿内政権の支配におち、そのもとで「在地の鍛冶集団の再編成を通じて在来の小規模な製錬が育成を受け6世紀半ば以降に鉄生産の繁栄を迎えていく」と説く。

- a 吉田晶「第二章第三節一 美作国と郡」『岡山県史』古代II 1989年 208~218頁
- b 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編－』1985年 139~141頁
- c 註21前掲書 174~179頁

註35 近藤義郎『石生天皇遺跡』 和気町 1980年

註36 註24前掲書 462頁

#### 参考文献

引用を明示していないものの参考し、啓発されることの多かった文献を掲げておく。

潮見浩「鉄・鉄器の生産」『岩波講座日本考古学3 生産と流通』 岩波書店 1986年

広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』 溪水社 1993年

松井和幸「日本と朝鮮半島の鉄と鉄製品」『季刊考古学』第33号 雄山閣出版 1990年

『石神製鉄遺跡』 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1985年

『戸の丸山製鉄遺跡発掘調査報告書』 (財)広島県埋蔵文化財センター 1987年3月

『弥栄町遠所遺跡群II (京埋セ現地説明会資料No90-04)』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990年

『兵庫県生産遺跡調査報告 第一冊 製鉄遺跡I (作用郡)』 兵庫県教育委員会 1992年

#### 上道郡周辺における製鉄関連遺跡参考文献

- 文献 1 『岡山市埋蔵文化財分布地図』 岡山市教育委員会 1983年
- 2 『上道町史』 岡山市役所 1973年
- 3 『上道北方坂口古墳・塚段1号墳・塚段2号墳発掘調査概要』 岡山市教育委員会 1986年
- 4 『瀬戸町誌』 瀬戸町 1985年
- 5 a 『岡山県遺跡地図』第5冊 岡山県教育委員会 1978年
- 5 b 『全国遺跡地図(岡山県)』 文化庁 1985年
- 6 『岡山県埋蔵文化財報告14』 岡山県教育委員会 1984年
- 7 『岡山県埋蔵文化財報告23』 岡山県教育委員会 1993年
- 8 『岡山県埋蔵文化財報告22』 岡山県教育委員会 1992年